

高病原性鳥インフルエンザから ダチョウを守るために



平成20年10月
社団法人 全国家畜畜産物衛生指導協会

高病原性鳥インフルエンザからダチョウを守るために

ダチョウの生理的特性と飼養管理の特徴

- ①ダチョウは3ヶ月齢から出荷までの長い期間を屋外で放牧飼養するため、様々な野生動物と接触する恐れがあります。また、その飼育場には、不特定多数の人が訪れます。そのため、ダチョウの衛生確保を図るためにいろいろな工夫が必要です。
- ②ダチョウは基本的に鶏の病気の原因となる様々な病原体に感染します。
- ③病気にかかっても親鳥は重い症状を示さないこともありますが、ひなでは症状を示し、死亡する場合があります。特に3ヶ月齢未満では原因不明で衰弱死することもあります。

ダチョウと高病原性鳥インフルエンザ

- ①高病原性鳥インフルエンザは、鳥インフルエンザウイルスの中でも、特に病気を起こす力が強い種類のウイルスによって起こる病気です。
- ②高病原性鳥インフルエンザウイルスは、この病気の発生地域からカモなどの渡り鳥によって持ち込まれ、これらの糞などを介して様々な種類の野鳥や野生動物にうつり、感染が拡大していきます。
- ③ダチョウもこの高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染してしまいます。
- ④この病気にかかると、尿の緑色化、沈うつ、食欲減退、羽毛の逆立て、流涙のほか、頭を曲げるなどの神経異常などを示します(写真1、2)。



写真1
緑色化した尿 (矢印)



写真2
ニューカッスル病に感染した時の神経症状 (頭(矢印)を下にしている)。本病に感染した場合も同様の症状が見られます。

- ⑤衛生状態が悪い場合やストレスが多い場合は、死亡し易くなります。
- ⑥親鳥では高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染しても症状を示すことはあまりありませんが、ウイルスは排泄し続けます。

《高病原性鳥インフルエンザからダチョウを守るためのポイント》

ウイルスの侵入・発生防止のため

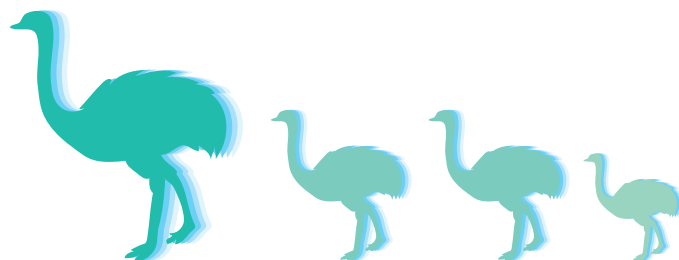
- ①ダチョウの免疫力を低下させるような密飼いや不必要な移動、環境ストレスを減らし、健康維持に努めましょう。
- ②水飲み場やえさ場にウイルスを持ち込むカラス等の「野鳥」や「ネズミ」等が近づかないようにしましょう。
- ③ダチョウはネットや電気牧柵で囲って隔離飼育し、野鳥やネズミとの接触をなくしましょう（写真）。
- ④ネットや金網に、穴などがあれば補修しましょう。
- ⑤ダチョウの飼育場所および、その周囲の環境整備をし、野鳥やネズミ等の繁殖場所をなくしましょう。また、定期的に消石灰を散布しましょう。
- ⑥消毒槽の設置や長靴、衣服の消毒を徹底し、人・車両等によるウイルスの侵入を防ぎましょう。また、観光客など、不特定多数の人とダチョウとの接触は避けましょう。



写真
金網で囲まれた中で飼育されているダチョウ

もし発生があった場合や疑われる場合は

- ①近隣で高病原性鳥インフルエンザの発生があった場合には、放牧を一時的に中止し、舎内で飼育するとともに、鶏の飼養関係者との接触を自粛しましょう。
- ②飼っているダチョウが高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染したと疑われる場合は、最寄りの家畜保健衛生所に届け出て、指導を受けて下さい。



- ・複数のダチョウに異常な症状がみられた場合は、飼育場への人の訪問等を制限し、次のいずれかの機関・動物病院へ連絡して下さい。

①お近くの家畜保健衛生所

②地元の市町村役場

③お近くの動物病院

（高病原性鳥インフルエンザの発生予防のためには、鶏、野鳥、ネズミ等と接触しないようにダチョウを飼いましょう。）



社団法人全国家畜畜産物衛生指導協会

〒113-0034 東京都文京区湯島3-20-9 緬羊会館内

TEL : 03 (3833) 3861 FAX : 03 (3833) 3864